

伴 一憲 (ばん・かずのり)

1932年福岡県に生れる。早稲田大学第一文学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。専攻 哲学。現在早稲田大学高等学院教諭。

〔著書〕『闘争の倫理』(共著、二玄社、1987年)。

〔訳書〕W. アーベントロート『ショーペンハウアー』(理想社、1981年)。ヘーゲル『ヘーゲル哲学入門』(共訳、日清堂書店、1977年)。

〔論文〕「ハイデッガーの思索の事柄」、「感覚について—ハイデッガーにおける—」、「道元における仏性の問題」、「ニヒリズムと科学と禅」、「始原とロゴス」、他

〔家郷を離れず〕

一九九八年三月二〇日 第一刷印刷
一九九八年三月二五日 第一刷発行

著 者 伴 一 憲

発 行 者 久 保 井 浩 俊

印 刷 者 藤 原 豊

発 行 所 株 式 会 社 創 文 社

〒一〇二一〇〇八三

東京都千代田区麹町二一六―七

電話 〇三―三三六三―七二〇一

振替 〇〇―二二〇〇―九二四七二

(著者との申し合せにより検印省略)

藤原印刷・鈴木製本

ISBN4-423-10098-3

Printed in Japan

目 次

凡 例	i
-----	---

第一部 「空と即」——西谷啓治先生特別講義

第一景 「空と即」の背景	五
第二景 住処 ^{すみか} としての世界	四
第三景 事々無礙と信の世界	六
第四景 空と即——海と小波	八
第五景 科学と禪	一三
第六景 イマジネーション	一五
付 録 ハイデッガーと西谷	一八

第二部 家郷を離れず

第一章 考えるということ	二九
--------------	----

第二章	問わるべきこと	三六
第三章	家郷を離れず	三七
第四章	感覚の根源性	三七
第五章	開けへの道	二九五
第六章	言葉と有の内景	三二
参考文献		三四
あとがき		三五

家郷を離れず

西谷啓治先生特別講義

第一部

「空と即」

——西谷啓治先生特別講義

第一景 「空と即」の背景

伴（一憲） 今日先生が以前お書きになられた、「空と即」（一九八二年初出）という論文について、二三お聞きしたいと思って参りました。

西谷（啓治） 僕も近頃は何かぼーとした感じで（笑）あれについても漠然とした記憶だけが残っているだけで……、要するに「空と即」という題目で書けと言われて、まあ書かされて、いろいろ書いた。そのことは勿論覚えています。実は、あれは原稿としての枚数が指定されていたんですが、書き出したら非常に超過してしまつて、その上原稿の期日も決まっているんで、すっかり困つてしまつてね。だいぶん慌てました。だから最後の部分は、今でも記憶しているのですが、大まかなことを、ばあーっと結論みtainな形で書いてそれを渡したんで、実際は最後の部分がもっと広がっていくはずだったんですね。それが出来にくい、出来ないうちに、その最後のところだけが結論みtainな形で無理に……、まあごまかしというわけでもないんですが、いい加減に、分析や結論みtainな形を、説明もなしに書いて終わってしまったという感じです。だからあれはどうも未完のものだし、もうちょっといろいろ考えていたことを余り展開しない形で一応のけりをつけた、という記憶があるんです。

伴 そこでまず、先生に書いて頂いた色紙の言葉についてお尋ねしたいのです。

超出語言情識の表

語言情識ごんじょうしきの表を超出して

得入無門之門

無門の門に入るを得れば、

則尽大地無不是門

則ち尽大地じんたいち、是れ門ならざるは無し

その「尽大地」というときの「大地」ということで、先生はどのようなことを考えていらつしやるのかな、といつもそのことを考えて眺めていました。

西谷 まあそうですね。やっぱりそういうことを言いたかったんでしょうな。そういう大地ということ。そこら辺をもっと細かく分けて言わなくてはならんことを言わないままに終わっている。だけど、そうですね、極端にいうと、全体がその大地、尽大地という言葉でしたか、大地ということ、大きな地ということ、はつきりさせることが主目的だったと思います。「地」ということは「天」に対しての「地」ですけれどもね、禪宗の建て前というか、立場とかからいくと、天も地も含めて全体を大地という形で呼んでいる。どちらかといえば勿論「地」の方を重くとする立場ですけど、そうかと言って、いわゆる地面だけという立場でもない。そこが大きな問題の所在の場ですね。だから禪では初めから「空」とかそういうことが入ってくるわけですね。尽大地がそのまま場である。そういう大地というのは天に対する地でもないし、そうかと言って天を離れてとか、天ではない地であるというのとも違うし、まあ一般にいわれる「天地」(普通にいう「宇宙」)のうちの「天上」、天の高いところでもない。禪では昔から「大地」という言葉を使っていますから、その気分を生かして、その気分を出すような気持ちで使ったのではないですか。もとの題は何という題でしたか。

伴

「空と即」です。ところでヘーゲルも大地 *Erde* の仕返しを受けるとか言っているし、ニーチェも、ハイデッガーも大地ということを行っていますね。

西谷 そうですね。まあそういうところと前から結びついて考えていたわけだから、最後に「地」を強調することはあったと思いますね。ただしそれが大地、尽大地ということだね、禪で言われた意味合いからは、天地合させたところ、普通の意味の天地を一つに合わせたようなところ……。そこで「即」ということは、むしろ難しい問題だけれど……。空と即ですが、そういう場合、空という概念を問題にしても、その空はやはりただの空ではない。どこか「尽大地」という意味のことがある。つまり我々の存在の場ですから、現在の場、今ここに自分がこうやって存在しているという、その根本的な現場というのかな、とにかくそういう「現場」という感じで「地」ということ、また尽大地ということと言ったと思います。

伴 そこで、これから順序立てて質問させていただきます。

西谷 まあ記憶はないですが、(笑)でも自分が書いたところだから思い出すかも知れない。ときどき間違うかもしれないけど。

伴 「大地」と言われる所が我々の存在の場ということですが、ヨーロッパの哲学の傾向は「大地」から離れて、我々の存在の場を知性の領域へ無理強いしているように思われます。先生も「空と即」の中で、「人間はロゴスをもつ生きものである」と言われるときのロゴスを取り上げて、思惟と存在、思惟と言葉との本質的な結びつきを究明される途上で、ヨーロッパの哲学の方向に一つの疑問を投げかけられています。《言葉をロゴスとして、言葉に内含される理法を問うにしても、その理法を知性(悟性、更には理性)の立場へ反省的に映して、それを「文法」という論理的な体系へ還元することが、果して唯一の正しい方向であろうか。》(「空と即」一九八二年、第十三巻、一二八頁)。

西谷 やっぱそれが根本の問題ですね。まあプラトン、アリストテレス、それ以前のソクラテスの時代から、

或いは思想の實際の転回からいえば哲学の初めからと言えるくらいですね。どういふことかな。まあ哲学の初めという代わりに哲学の終りの問題でも、そうですね、例えば、僕なんかには、ハイデッガーの影響を受けて来たということが早くからあるわけけれども、実存論的というような考え方ね、「今ここ」、ということが重要な要点になっているわけですけど。しかしまあ、あれですな、ギリシアの哲学や西洋の哲学の思想でも、哲学思想が転回して、その結果として哲学思想が生まれてくる。その生まれた思想が成長して、更に新しい哲学を生む思想となる。これは哲学史といった方がいいかも知れません。例えばギリシア哲学史、或いは広く西洋哲学史など、それを、しかしここではごく広い意味で実存論的とか、今此処とか、*Da-sein*（現一存在）というふうな立場から受けとめるとすると、やっぱり古代のギリシアの哲学から中世のキリスト教と、ずっとこう続いて一貫して何か考えられるものが根本にあるのではないか、というふうなことですね。

まあ、僕はここでは宗教学の見地に身を置いて言っているわけだから、とにかく何か「絶対」という事柄、また絶対というものを問題の根本にしなければならぬ。すると神という「こと」や「もの」があったり、またその神々に付属して、いろいろと複雑に考えられているわけですね。仏教では「仏性」といったり、「仏法」とか、「仏道」とか、「仏心」とか、まあいろんな仏の事が語られている。また「神仏」というような、総括的な概念で「神」や「神々」、一括して仏が問題にされている。更にまたハイデッガーのことにちょっと触れたときにも出ていた事です、天地の神々とか仏道とか仏性とかいうことですね。一方では、ギリシアの場合もそうですけれども、人間の現存在というものと、他方では、昔からの言い方からすると、やはり「宇宙」、コスモロジーというような、「天地」の神々、キリスト教だと「神」、神の創造という場合の世界創造の神ですね。それは一種のコスモロジーみたいなものだけど、それが、ひとりでに今此処での人間の存在、我々の自分の存在といふところ

をもってくる。人間のひとりひとりの自己の存在の源と世界の存在の源とがどこかで結びつかなければならない。絶対的なものとは本当はそういうもの。一方で絶対的なものが本当に現われてくるのはこの宇宙、広い意味での世界においてだ。そういうことをわりに早くから僕も言っていた記憶があります。例えば、キリスト教の場合だと、神が「光あれ」と言われたので光があった、という式のあれですね。あれは一種のコスモロジーなんですね。そこへ今度は大きな話題、キリスト教と世界の創造という問題、もう一つ大きな問題は罪の問題というのかな、アダムと創造と、それからアダムの墮落の問題です。「今……」という実存の問題にするときには、どうしてもそういう問題が含まれてくる。ハイデッガーの場合には、例えば Sein zum Tode (死への存在)、つまり死への「途上」にあることとか、その他いろいろと「みち」(道)とか、「途」とか、或いは「行く」とかいう意味を含んだ言葉が出て来ます。Weg (道) というドイツ語は、日本語や中国語においてと同様に、そのままで倫理的な意味を持つことができます。つまり「道理」という意味での「道」ですね。しかし「途上」という意味での「みち」でもある。動詞になると「去る」という意味にもなり、weggehen は「立ち去る」です。英語でも *go away* とか *always* (ドイツ語では *unterwegs* とか *der Unterweg* 等々) ですね。要するに禅宗でいうような「今、此処に」という、その時や所が、根源の場の開けであり、同時にまた開かれた根源の場そのものに外なりません。「永遠の今」が「即今」であり、そこに「道」の通いも成り立っているということです。しかもそれは現実の自分の存在が其処に成り立っている、その場ということですから、同時に宇宙という中にいるという、そして天地、天も地も含めて宇宙ということがあってね、禅宗では其処を非常に強調するんですね。

伴 自己と宇宙との関係ですか。

西谷 そう、そういうことを大分問題にしている。科学の世界観、さっきのコスモロジー。コスモロジーとい

うと、やはり科学の立場ですね。科学の見地や世界観ということがどうしても基礎ですから。しかし科学の見方という、何かそういうコスモスというものがどこか初めからあって、という問題になりますね。まあ、これも非常に大事なことで、ハイデッガー自身だって、『*Sein und Zeit*』（『有と時』／『存在と時間』）の中からもそういう考え方が現われてくる感じがありますから。しかし『*Sein und Zeit*』以後になってくるとね、そういう問題に関して、ハイデッガー自身、やはり天と地ということを言い出してきます。まあいろんな問題がからんでいるわけですね。ハイデッガーも、最後の決着点まではつきりさせたとはいえないようなところがあり、禪とかその他いろいろな立場を広げて仏教を問題にするとね、いくらハイデッガーでも、なかなかそう簡単には言えないところがありますから。だけどこれは、哲学的ないわゆる従来の哲学的伝統、ギリシア哲学の伝統だけでも説明され尽くされないというところがどこかあってね。

そうですね。いわゆるギリシアの哲学、普通に今まで哲学史が理解してきたような哲学の立場ということだとね、これはなかなかそこまでいかない。一つは、哲学の初めが科学と切り離せない、そういうような面もある。

これはタレーズなんかの哲学の時に現われていて、すべてのものの根本は、例えば「水」であるといったときに、タレーズは「水」をどういうものと考えていたのか。これはよくわからない問題です。その問題について、或る人が、その「水」はかくかくの本性をもったものだと言明を試みたということらしく、その説明を読んだ覚えがあるが、それがどういう説明だったかはつきり覚えていない。とにかくソクラテスに至ってはじめて、自分の無知を知ることが最高の知であるという式の自覚の智が出てくるわけだから、無知という、知を超えるという、その超越の智には明らかに科学だけではない知があります。何が一番問題になるのかというと、やっぱり自己、我、自分を知る、しかもその自分の無知を知る、というそういう複雑な智ですね。それに対して、タレーズ

やアナクシメネスなんかの説明の仕方には一種の宇宙論とか、世界観とか、そういうことがそこで問われていて、「水」、「空気」というものを根本原理とか、そういうことが非常に早くから出てくる。まあそこから現実の問題にすると、もうそれは、現代から見れば「科学」scienceと呼ばれる筈の立場ですね。それが哲学という純粹知の形で、つまり「愛智」Philosophieの立場の上で非常に求められた。まあそういうふうなことかな。

そこいら辺の、とにかく身のまわりにあるいろんなもの、水とか、空気とかが初めて出てきて、それが宇宙万物の「もと」と考えられる。そこから更に新しい問いが出てくる。つまり自分自身の生活、自分の生きている生き方で、その問いは今度は自分の生活ということ、まあソクラテス、そしてそれ以後の哲学の展開ですね。ストアとかエピクロスとかいろんな流派の分立となり、ああなると、もうただの自然界というだけでなく、人間として自己の存在、他者の存在、自他の社会的関係への関心ですね。社会学や心理学や倫理学などの問題への関心が非常に強い。ソクラテスより以後では、「知る」とか「知らない」とかいう知識の領域では、科学の問題と哲学の問題とが一つになって動いている感じです。そこでは純粹な「愛智」(哲学)が働いていて、「俗談、平話」dogmaの独断論を脱している感じです。しかし最後にはそうすな、まあ僕はプロティノスがギリシアの哲学の帰着点ではないかと考え、いろいろと問題にしてきた。プラトン、アリストテレス、それからアカデミックに、非常に科学的になるにつれて、一方ではギリシアの哲学に懐疑論なんかが出てきている……。僕は最後に総括的なあれでは、やはりアリストテレス及びプラトン、それから懐疑論のいろんな立場を踏まえて、プロティノスというものを、哲学としては非常に高くかっているのです。

プロティノスまで来て、今度は哲学の立場が宗教へ移るといふかな、一面では世界観的なメタフィジック(形而上学)というところへ入っていく面と、宗教へ入っていく面と両方出てくるという、プロティノスの一者とい

うかそこら辺を非常に高く評価して、プロティノスに至って初めて宗教の立場というものが開かれてくると。それをはっきりと描いたのは、どこだったかな、僕はどこかで書いた記憶があるんだけど、アウグスティヌスが『告白』《Confessiones》の中で言っていることがあるんですが、いろいろな立場を踏まえて最後にアウグスティヌスは、プロティノスと言わずプラトンと言っています、プラトンの思想を通して、実際は新プラトン学派を通してはじめて、「自分と神に至る道を知ることが出来た」、というふうな言い方をしています。そのところでロゴスということをはじめて言う。ロゴスは、いわば道、道みたいなものですな。神と自分、絶対者と自分との間に道が出来たという言い方をしています。アウグスティヌスからやっぱ大きな時期としてのキリスト教の立場が準備されているという、そういうことが言えると思いますね。そういう意味ではアウグスティヌスが道をつけたと、彼において、一方でロゴスという道が初めてついたと、『告白』を読むとそういう感じがよく出ていると思います。神と人間の問題が、罪という問題として出てくる。罪といってもなかなかむずかしいですが、要するに「神との間に道がない」ということではなかったかと思うんですけどね。一方でそういうロゴスの問題が出てきて、もう一方では、後世から言うミスティーク、神秘主義と言われるような神との結びつきが、現実の自己、自己の存在を決定する場であるという式の言葉が出てくる。アウグスティヌスが中世の哲学のいわば出発点になっている、と思うんですね。大体プロティノスの立場ですからロゴスという立場ですが、ただしアウグスティヌスになると、今度は罪とか、自分の無知、自分の罪、そんな問題が大きく浮かび上がってくる。これは『告白』なんかを読めば分かります。如何にして自分において、プラトンの哲学により、道が出来るか、そしてそこに至るまでの自分の彷徨、さ迷いというものを詳しく書いています。そこではいつも現に自分がどう生きているのかというそういう問題、アウグスティヌスを通して、要するにそういう哲学の歴史からいうと、非常にむずか

しい問題が沢山でてきていると思うんです。自分の悪の問題と結びついて捉えられている。しかし、それがロゴスの立場（ロゴスと呼んでいます）、それによって罪のある者でも救われる、という式の考え方がだんだん展開されていく。

そこから、もう一つこう、これは科学の立場というわずかしさがあるんだけど、トマスになってくるとアウグスティヌスとの違いが出てくるわけです。違いの一番基礎的な立場はやはり科学の問題と結びついている。

まあ、コスモロジーというのか科学というのか、そんなことで、今度は罪とばかりではすまない。そこで科学と結びついた哲学の方向というのは、これは非常にアリストテレス的なことですね。アリストテレスの反プラトン主義という、これが出てきて、そうなると思うのは、ロゴスと言われていることがプラトンの段階ではつきり出てきただけで、いわゆる科学的というのかな、そういう性格をもってくる。これがギリシアの段階ではつきり出てきたのがプラトンに対するアリストテレスの立場なんですね。そこら辺で展開されたアリストテレスというのは、いろんな宇宙論とか、いろいろな問題を展開している。これは科学とはつきり結びついている。具体的にいうと、トマスの時代にもそういうことがイスラムの世界からも出てきているのだが、トマス以前にもアリストテレスの方向、ロゴスというのが科学という性格をだんだんとってくる、そういう方向がずっとあるんですね。それが哲学史でよく言われるのは、あれではないかな、イスラムなんかの勃興してくる影響とも無関係ではないということです。まあそこでアウグスティヌスでロゴスといった宗教的な人間の霊性というか、人間の罪の問題とは違った形で、コスモロジーというのがある間わてくるというふうなことがあり、それがイスラムでかえってより発展していくというようなことはあったのではないかと思います。まあそんなあれで、そこから発展したアリストテレスの思想の展開が非常に強く入っていくというふうなことですね。トマスでは割り合いロゴスが科学